

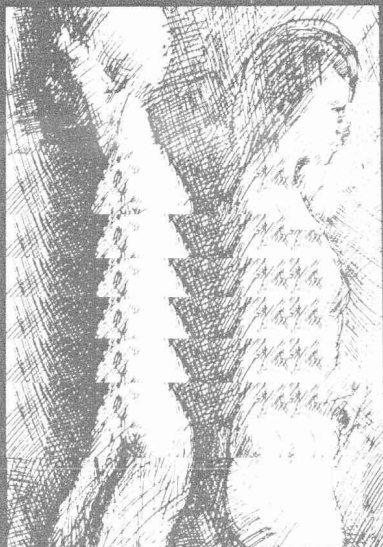


青春の記録

久山 康 編

筑摩書房

青春の記録



久山 康 編

筑摩書房

編者

久山 康 (くやま やすし)

大正四年岡山県津山に生まれる

京都大学文学部哲学科卒業

現在 関西学院大学院長

編著書 「読書の伴侶」「信仰の伴侶」
「近代日本とキリスト教」「近代
日本の文学と宗教」「文学
における生と死」「四季折
り」の歌」他

青春の記録

一九七四年四月三十日 新装版第一刷発行

編者 久山 康

発行者 井上 達三

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話 東京(二九)七六五一(代)

郵便番号 一〇一一九一

振替 東京四二二三番

印刷 三晃印刷 製本 永興舎

装画 石井 信

(分) 0095 (製) 81045 (出) 4604

青春の記録・目次

巻頭対談 日本の青春

遠藤周作
久山 康

現代の精神状況と青年たち 現代青年の思考と行動——そのニヒリズム——
—— 教養主義のもたらしたもの 個人的人間から集団的人間へ
近代日本と文化の受容 明治の青春像——独歩・樗牛—— 藤村操と
倉田百三 青春の気恥ずかしさ 教養派の人々 グレート・マン
の退場 青春と自殺 青春と土着化の問題 青春の求めるもの
青春と挫折

巖頭の感

藤村 操……………六

人生終に奈何

高山樗牛……………元

欺かざるの記

国木田独步……………三

ローマ字日記

石川啄木……………九

哲学青年の手記

出 隆……………七

聖フランシスとステンドール — 三太郎の日記 —

青春の書簡

アグラにて — 郷愁記 —

若き哲学徒の手記

運命と摂理

わがいのち月明に燃ゆ

二十歳のエチュード

友よ 私が死んだからとて

愛と死と孤独

あとがき

阿部次郎……………二〇

倉田百三……………二四

杉 正俊……………二七

弘津正二……………二五

池田浩平……………二〇八

林 尹夫……………二七

原口統三……………二五

長沢延子……………二六

青木哲男……………二六

久山 康……………二〇九

卷頭対談 日本青春

作家

遠藤 周作

関西学院大学教授

久山 康

軽井沢ゆうぎりにて

昭和四十三年八月十五日

現代の精神状況と青年たち

久山 現代の思想的な状況をみますと、明治以来百年間の日本の近代化のもっている問題が全面的に顕わになってきた感じがします。しかもいままでは少数のエリートの中で自覚されてきた問題が、民主主義のもたらした教育の普及の結果、多数のものの自覚として顕わとなってきたように思うのです。従って、現代の問題を取上げれば、そこに明治以来の問題がみなこもっているという感じがします。そこで今日は現代の問題から話を始めていきたいと思います。

遠藤さんは、この現代の問題の焦点をよく把握されているように私は思うのです。一昨年『沈黙』という作品では、現代のもっている深いニヒリズムの問題を、転びバレンの苦悩を通して具象化されていますし、同時に、やはり近代日本の根本的な問題になっております外発的な近代化を伝統に即した内発的な近代化に転じ、自己の生存の根拠を確立するという問題を追求されている。これは「和服のキリスト教」という言葉でも表現されていますが、そういう根本問題は今日の日本人の、ことに若い人々の根本

的な問題じゃないかと思っているわけです。全学連の近頃の行動にしましても、そういう問題を背後にはらんでいる。それが自覚されているかどうかは別としても、遠藤さんが出されている問題の射程の中に実は入っているような感じがする。そういう意味で遠藤さんに、現代の思想状況を青年の問題にからめてお話をいただきたいと思います。

遠藤 ぼく自身は学校の教師をやっているわけではなく、比較的孤立した仕事だものですから、なかなか若い人たちと接触する機会がなかったのですけれども、ただ、今年の初めから『三田文学』という雑誌を引受けることになりました。そのために慶応の学生だけじゃなくて、いろんな学校の学生と接触して話し合う機会をもったわけです。そうしてみると、二つの面白い現象に気づいたのです。編集会議で出てくるかれらのテーマというのは、非常に単純に言っちゃうと、革命とセックスということだけです。これ以外の問題というのはそれほど彼らにとつて興味をひかないこと。それから二番目に、われわれが尊敬したり、それから読んだ大思想家なり、あるいはわれわれが青春時代に影響を受けたと思われるような文学者も、今の二つのテーマを論じていなければ、いまの若い世代にはそれほど興味をひき起こしていないということですね。大江健三郎氏と

か、あるいは江藤淳氏とか、高橋和巳君とか、吉本隆明君とか、こういう人たちのものなら非常に歓迎する、それから性的問題やエロチシズムの問題を論じている批評家や作家に敏感である、極端な言い方をすれば小林秀雄より吉行淳之介のほうに関心がある。そういう意味で、現代とその前の時代のものとは、大きな違いがある。

久山 たしかにそういう傾向は顕著ですが、小林秀雄さんたちの世代の文学者や思想家に今日の青年は興味をもつてないだけでなく、社会運動に関心をもちながら、共産党や社会党の今日のリーダーに対しても興味をもっていない。

遠藤 それはそうです。興味がなにか、あるいは憎む。久山 自分たちより古い世代のものにはすべて否定的なのですね。

遠藤 だから内面追求のほうはやや黙殺的だといえるんじゃないでしょうか。

久山 ただ、いまの革命とセックスという問題以外に、ニヒリズムの問題に苦しんでいるわけではありませんか。

遠藤 つまり、彼らの気づかざるニヒリズムが全般的に忍びよっている。

久山 革命運動といっても日本の国民の現実をふまえて着実に社会を革新していくというよりも、……

遠藤 つまり現在の空虚感を埋めるのに彼らにとって一番、セックスと行動とが手っとり早いと言うことですね。

久山 行動主義で、そこでは青年らしい正義感の発露はあるが、実のところは社会の革新よりも自分の存在の確認ということのほうが中心問題になっている感じがするのですかね。

遠藤 なるほど。ふん、ふん。

久山 だから、いまの全学連の行き方に対していちばん激しい批判をもっているのは共産党だと思うのです。こんな国民から遊離した革命騒動をやってもらったら、本当の革命の邪魔になるし、保守政党の好餌になるという批判をもっているでしょう。ところが彼らは警官隊と衝突して、初めて自分の生命を賭ける人生の目標にぶつかり、その緊張のなかで自己の存在を確認するわけです。しかも同時に平素非常に孤独な生活をしている彼らは、その孤独の打破を、命と一緒に賭けてともに国家権力に抵抗している同志がおるということで初めて体験する。そこにコミュニケーションを失って孤独に閉ざされている現代の青年が、初めて生きる喜びと力を体験する機会が生まれる。それが今日学生のデモをあれだけ激しくし、盛んにしているのだと思うのです。しかも背後では革命とともにセックスのことが

実は問題になってきている。そこにも孤独からの脱出口があるように見えるからですね。

遠藤 そこから提出される問題は、彼らの考えている連帯というものが本当の人間の連帯でありうるかという問題と、それから彼らが一時的に自己確認をするセックスというものがはたして本当の意味の生の充実を与えてくれるものであるかということですね。そこを考えると、先ほど久山さんがおっしゃいました明治から今日までの近代の問題というのが大きく背後に浮かび上がってくるのではないか。

現代青年の思考と行動——そのニヒリズム——

久山 そうですね。近代人の根本に秘めている虚無感というものは、昔はエリートの思索の中で浮かび出てきたものですが、近代社会の進展にともなうそれが生活の各分野に深く浸透して、全体の学生のムードになっている。そしてそれが学生を全学連の過激な運動にもかりたてている。

たとえば、資本主義社会は非常に実利的で、その発展の過程のなかで職業の神聖さというものを徹底的に失わせていった。しかも分業は進み機械化は進展し、組織は拡大し

ていって、個性的人格の生き方が困難になっている。しかしその反面では社会の階級的な矛盾も、ことに戦後は民主主義の体制と技術革新による生産の躍進で戦前よりは解消され、国民の大多数が中産階級的な意識をもつてくれるように社会の構造が変わってきた。これは革命運動を沈滞させ、青年を社会運動で生甲斐を感じさせることを困難にしている。その上科学技術の躍進は科学的思考法を普及させて、国民は科学的世界を越える内面的世界の感受力を失ってしまった。そこで一時代前の青年のように内面的に人類の文化的遺産を受け継ぐことに関心をもたなくなった。彼らには技術革新のもたらした生活の向上の上に築かれた人生の享樂であるマイホーム主義の世界が眼前に展開しているが、それも微温的で真の生活の目標にならない。だから青年には人生の目標がなくなっており、僅かに大学に入るまでは外から与えられている受験勉強だけが当面の生活目標になっている。そしてこれに猛烈に集中している。ところが大学に入るとそれが一べんになくなってしまふ。大学に入ったとたんに現代人の人生目標を失った空虚さというものに直面する。しかも受験勉強は長期の地道な探究を必要とする学問とは結びつかないし、マスプロ化して人格的接触を失った教育、専門化して主体性と広い視野を失った学問、微

温的な文化主義では満足できない。そこでこの空虚からどう脱却するかというと、やはり自分の全身をぶつけていける目標がなければならぬ。そこに社会科学と結びついた革命運動への急激な没頭が起ってくる。遠藤さんの「神の沈黙」ではないが、世界自身が無意味化し、反響のないものになってきているという、そういうニヒリズムが広範囲に青年の心に潜在していて、それが学生運動として世界の到る処で噴出してきているのではないかとぼくは感じているのですがね。

遠藤 同感です。思想がありすぎるといことが、それは悪くないんだけれども、若い世代にとってはどの思想も相対的になってしまったということは悲惨だな。どの思想も相対的になってしまった場合、感覚的に確実なもののみが信頼があるという気持ちになって、それがセックスと行動という二つにつながる。ですからね、ぼくはよく若い学生たちに言うのですがね、君たちの虚無主義というようなものは、むしろ虚無主義という徹底したものじゃなく、一種の空白感だろうと。これはぜいたくによる空白感といってもいいと。つまり、たとえば読む本がたくさんありすぎる。どれを選択していいかわからないし、それから一冊読んでそれをいつまでも持久してそれを考えるということが

ないから二冊、三冊と読んでいくうちに、それが自分の頭の中に積み重なって、結局その中へ秩序を与える力がないものですから空白感だけが残ってしまう。そういう意味では戦中派のほうむしろ仕合わせだったと思うのですよ。読む本が少なかっただけに。

教養主義のもたらしたもの

久山 その読む本が量的にふえたというよりも、たとえば明治の末年から大正期以後は『三太郎の日記』の示しているように思想遍歴の教養派の時代でしょう。そうしますと、あのときには古今東西の古典という古典が青年の眼の前に全部出てくるわけです。青年はその遍歴を通してともかくも内的成長を楽しんだ。ところがいまの思想の相対化は、そういう教養主義そのものに対するマルクス主義の批判によってまず起った。これは昭和の初頭からの出来事でしょう。しかもそのマルクス主義の權威が、戦後十年経った頃からスターリン批判に続く中ソの対立、それから公式的ないままでのマルクス主義では把握できないような社会構造の変化のために、崩れてきた。その上マルクス主義と実存主義の相互批判もある。従って古い教養にも帰れない

し、マルクス主義でも十分でないし、実存主義も一面的だということになると、青年は一つの思想に落着いて根を下すことが出来ない。互に対立し矛盾し、相互に権威を失わせている多くの思想のなかで、相対主義のもつ空虚に翻弄されているわけです。

遠藤　ですから、いま、先ほど久山さんがお挙げになりました受験勉強、それからその次に現われるいまの教育制度の、やはりいちばん大きな弊害であるところの個人的に親しむ先生というものをまたないこと、つまり人間と人間との人格的なふれ合いというものが欠けてしまったということ。その一番必要な青春時代であるのに、われわれの時代よりも少なくなってしまったということは、現代の青春の悲しさですね。ぼくは、あまり同情するのもしやだけれども、これは可哀想だと思う。

久山　そうですね。これは、やはり戦後の高度な資本主義の発展が大学教育を受けたものを非常にたくさん要求しているということからもきているのでしょうかね。

遠藤　そのため、学問の民主主義化でなくて学問の風俗化という形が出てきたんじゃないかな。

久山　私たちの大学におりましたのが昭和十年すぎですが、そのころはだいたい大学生の数が七万人だったのです。

いまは百四十万。二十倍になっているわけですね。ですから年々生産していく大学卒の数というのは、おそらく明治・大正を含めたぐらいいのものが二年ごとぐらいい出るのじゃないかと思うのですね。

遠藤　それからもう一つ、いまの世代が、自分の内面的なものよりも外面的なものを重視するために、内面的な悪をすべて外面的な社会や政治的原因に帰着せしめている傾向がある。あそこにある今の世代の悲惨さを感じます。

久山　そうですね。そしてそのために少し内向的にならざるをえない局面になると、いままでの強烈な行動の原理が一朝にしてくずれてしまって大きな蹉跌が来る。

個人的人間から集団的人間へ

久山　これはどうでしょうかね、少しさかのぼりますと、以前の青年の中には、教養は西欧的でも感情的には非常に古い日本人のもっていた精神態度というものが伝承されていて、行動の中心に、人格の中心になっていたような気がするのです。与謝野鉄幹の作った歌に、「友を選ばば書を読み、六分の俠気、四分の熱」というのがあるでしょう。理想の友人像は新しい本を読んで教養をつけていなが

ら、俠氣と熱のある男だというわけです。「熱」というのは、「バイロン、ハイネの熱なきも」とあるので外来のロマンティズムの熱でしょうが、俠氣は純日本産でしょう。そしてその俠氣が実は主体性だった。新しい教養だけだと漱石が『坊ちゃん』で赤シャツを批判したように、人間として浅薄になるが、その中心に古い日本人の道義である俠氣があつて、それが人間同士の関係においては信頼できていたところがあつた。ところが近頃この大学でも困っている現象というのは、個人対個人で、先生と学生が対するといひ学生なのですが、それが一つ集団に帰っていくと、たちまち変わつてしまふということです。昔だったら個人の約束だとか信義というものは、自分がたとえどんなひどい目に会つても貫くということに人間の一番大切な道を見出していた。そういう意識が非常に強かつたと思うのです。そういう意味でいうと非常に主体性を喪失してきているというか、集団的な人間になつてしまった。そこには過去の日本人のもつていたモラルの断絶があるのだと思うのです。それが戦後、ことにここ七、八年とか十年ぐらいの間に顕著になつてきて、主体を支えているものがなくなつてきている。これが今日の青年の悲惨さであり、これを回復するというのは大変なことだという感じがするわけです。

遠藤 話を本質的なところへ戻すならば、明治というものの悲劇が現象的にいちばん出たのがいまだということですね。あそこでブツツと伝統を切つた。つまり根をブツツと切つたが、まだ夕映えというか、残り香みたいなものが大正から昭和の初期まではかなり続いておつた。それが決定的にだめになつてしまったのがこの戦争を通してで、あそこで全部がなくなつてしまった。だから、僕は、三十代の連中はとも角、二十代初期の連中をみると、外国人という気さえしてくるんです。そのほうがわかりやすい時がある。久山 そうですね。しかもその際、今日の大人の世代といふものがすでに伝統的生命を失っているのじゃないか。私は大学に勤めています、大学の先生たちと学生とは物の考え方では相違点が多い。コミュニケーションができない。しかしよく観察してみると、両者の考え方に質的相違があるのではなく、大人の世代の伝統の喪失を徹底するとああいうところにいくわけです。亀井（勝一郎）さんは和辻（哲郎）さんの『古寺巡礼』が象徴する大正の教養主義から大和の仏は信仰の対象から美的観賞の対象になつたと批判していますが、戦前の教養派の学生ですでに宗教的生命から離れ、真の自己否定の原理を失つた。ニイチュにとつて神の死がニヒリズムの到来を必至としたように、すでに

そのとき今日のニヒリズムは胚胎していた。教養では死の虚無と対決できないし、生命を賭けた革命的实践もできない。戦後教養の無力の自覚と教養への無関心が拡まるなかで、民主主義は自由を拡張していった。そこで今日の青年は自己統御の原理のないままに、自由に自己主張をすることを訓練されているのですから、アナキズムに陥るのも無理はない。反帝反戦を旗印とし、ベトナム戦争への反対をスローガンとしているので、一見したところ純潔なヒューマニズムの発露のように見えますけれども、その底にはあらゆる既存価値の否定への衝動がこもっていて、革命運動への連結は、既成社会否定の起爆剤である場合も多いですね。羽田事件の山崎博昭君の日記が語っているように、ベトナム反対に挺身しながら、殺戮を道徳的に否定する原理をもっていないことを自覚しているのですからね。

近代日本と文化の受容

遠藤 それからもう一つ、明治以後われわれが受けた教養というものが近代的学問だったこと。西洋の近代的学問で、近代的学問イコール万能主義という幻影が明治以後われわれにかなりありましたよね。それで近代的学問の背後

にある根というものは明治時代の学問の輸入の仕方、西洋的学問の輸入の仕方の中であまりなかったのじゃないか。だからわれわれの長い間の学問の集積というのは文明というものには役立ったけれども、根本的文化の点において、明治百年のわれわれの外国勉強というのはどこまで役に立ったかというところに疑問がある。実際的にそういう学問を、いま、教養という言葉をお使いになりましたけれども、われわれの時代まで実際のな行動原理、あるいは対人関係というものの原理というものは、昔ながらの儒教的な匂いのする家庭教育だったのではないかと思えます。外国からの愛とか宗教では一向影響はうけず、この儒教的なものでやっとう行動原理のツジツマをあわせ道徳を教つてきたのだらうと思います。しかし、その弱々しいものと、その最後の残り香がなくなったとき、われわれがいまの若い世代に本来ならば渡してやるべきボタンがもともと根がなかったもので、彼らもまたそれを放棄した。これは明治時代の、大きくいえばわれわれのおじいさんあたりからわれわれの時代に至るまでの文化の輸入の仕方に根本原因があるのじゃないでしょうかね。

久山 欧米文化の根を移さなかったという批判がありますが、その根を移すには自国文化の伝統に定着することが

必要になる。だから、それが遠藤さんの問題にされている「和服のキリスト教」という根本問題につながっているわけですね。それをもう一べん考えなければならぬ。

遠藤 ですから、ここに予定されているいくつかの青春の記録に、永井荷風の「新婦朝者日記」を加えて頂きたいですね。短いのですが、明治の文化の受入の仕方の悲劇というものを青年荷風がああときはああときなりに一生懸命苦しんで、日本はこれではだめになるという気持ちを表現している。

久山 明治の時代にそういう問題をいちばん強く自覚していたのは漱石じゃないでしょうか。外発的近代化の苦悶のなかで、一生狂気と境を接して生きた人ですからね。

遠藤 漱石でしょうね。しかし短いものとしてはつきりこの点を出しているのは、ぼくの読む限りでは荷風の「新婦朝者日記」ですね。つまりあれは初めて外国に行つて、外国には本質的なものがあり、それから明治の日本の文化の輸入の仕方というのは本当に根あつて成り立っているものじゃなかったということをお口を酸っぱくして言い、これでは日本はだめになると言っている。やがて彼は後退していつて甚だしようもない世界に行つてしまつたけど。いま文化の根本的な問題までに青春の記録のお話を還元させた

のは、なにか一発そういう先人、先輩の反省というか、そういうのが、入れられればと思つたのです。

明治の青春像——独歩・樗牛——

久山 私も荷風のそれを入れようと考えてみたのですが、他の記録とやや趣が異つていて、異質的なので見合わせたのです。

それでは歴史的に各時代の青春像をふり返つてみたいと思いますが、幕末の青年を代表するのは志士でしょうが、彼らは天下国家を憂えるということで全存在的に燃え上つていて、それ以外に自分の主体の問題ということが問題にならないわけですね。これは封建社会のイデオロギーである儒教がおそらく「修身齊家治國平天下」というように個人と家庭と社会というものを間隙なしにひと続きに係づけていて、個人的な懷疑煩悶の入る余地のない価値体系を形作つていたからでしょうね。ことに植民地化の危機にさらされていきましたから、国家社会のことに非常に熱情をそそいでいたのは当然だと思ふのです。そういう天下国家のことに熱中していた青年たちの世代から近代的な自我の形成されてくる時代になるのは、だいたい明治の二十年代で

すね。日本では西欧のようにルネッサンスが起こってそれから宗教改革が起こり、産業革命や政治の革新が起こるといふ形でなしに、政治の革新がまず起こって、そのあとからそれを推進し基礎づけるような形で思想の革新が起こり、経済的改革が起こってくる。思想的には明治六年に明六社の啓蒙思想が起こり、そして十年代に自由民権運動が力をもってくる。そして二十二年に憲法政治が行われるに至るのですが、明治の二十年ごろからルネッサンス的な風潮が起こってくる。それにはかなりキリスト教の影響があるわけですね。その頃讃美歌や聖書も翻訳されますし、透谷や藤村など『文学界』の人々は洗礼を受けた人々ですね。透谷の「内部生命論」もそういう地盤の上に出てきた。こうして新しい近代的な自我とか、人格というものが形成された。この記録に選んで載せた独歩の『欺かざるの記』は、この二十年代のキリスト教的地盤に立った新しい自我の姿を示しています。独歩は植村正久から洗礼を受け、その説教に心の糧を得ていますが、同時にワーズワースの詩にも感銘を受けていた。そして当時は文学者になるか牧師になるかの選択に迷っていた。ところが佐々城信子という人と結婚しながら五カ月で別れていく。その苦しみを描いているところを、この記録には抜萃してみたわけです。ただこ

の記録には新しい近代的自我の嚙みたいなものが出てきて、ロマンティックですが、冷徹な懷疑煩悶が少ないのじゃないかという気がしますね。

遠藤 つまり、ロマンティズムというものですべて覆われてしまっていて、本質的なものに迫まる懷疑煩悶が少ないというふうに解釈してよろしゅうございますか。

久山 そういう感じがしますね。独歩は明治四十一年に病死しますが、そのころになりますと死を眼前にして苦悶します。一方では青年時代の輕信を恥じるとともに、他方では青春の頃自分の心の扉を開いてくれた植村正久を求めたりします。そういう状況で初めてロマンティズムの陶醉から醒め、人間の実存的問題を直視して、信仰の問題に真に出逢っている感じですね。若いときの信仰というのは、キリスト教固有の罪の救済という福音的信仰ではなく、一種のロマンティズムですね。

遠藤 さつき久山さんがキリスト教と近代自我の問題、日本におけるその二つの関係、ちよつとふれられましたけれども、この点は意外と日本の明治分析で輕視されているような気がするのですがね。プロテスタンティズムが明治に与えた影響というのはプロテスタントの学者は書くんだけれども、一般の人はあんまり認めていないというか、食

わず嫌いで放つたらかしているような感じがする……。

久山 しかし亀井さんなどはその点を強調しているでしょう。島崎藤村の精神形成、『若菜集』の形成されてきた背後に明治学院のキリスト教の影響を見ているでしょう。

遠藤 ただ、国木田独歩の場合もそうですが、文学者の場合に比較的ロマンティズムとプロテスタンティズムが近代自我の形成に結びついているような感じがするのです。これがまた彼らの信仰から「さよなら」という弱さの一つになっているのですが、これはどうしてなのでしょう。プロテスタンティズムの中にロマンティズムを併発する何かがあるのでしょうか。ぼくはいつもそれは不思議に思うだけです。

久山 それはロマンティズムの中にプロテスタンティズムとヒューマニズムが中和されて共存しているからではないでしょうか。この二つの思想はいずれも近代思想で、個人の新しい自覚の形態ですが、一方は人間否定の神中心主義であり、他方は人間肯定、人間解放の思想で、互に矛盾対立しています。ところがこの二つの思想を同時に所有したいという欲求が青年期には強い。それは同じ近代思想であることと、まだプロテスタントの人間否定に徹するほど、人間の暗い本性への洞察も絶望もないからです。この

二つを直接的に結合し、詩的構想力で連続させると、ロマンティズムが発生するわけです。そこで青年期にはプロテスタンティズムは必然的にロマンティズムを呼び出し、ロマンティズムに変質されたプロテスタンティズムは、その本来の人間性の否定を失って、信仰も曖昧となり、結局は信仰が結定しないわけです。それに明治十年代の終りから二十年代にかけては、植村正久先生が西欧文学の最も有力な紹介者であつたということもあるわけです。

遠藤 すると、ロマンティズムですからキリスト教と本質的な結びつき方がある意味ではしていないというわけです。明治の青年たちとプロテスタンティズムとの結びつき方と、いまの若い全学連の学生たちとマルキシズムとの結びつき方の間に、ある共通性というものがあるでしょう。つまり、先ほど話に出た幕末の青年にとっては国家の問題はもつと生活に関係するものだったと思うのですよ。いつまでたってもおれたちは貧しいめしの食い方しかできん田舎侍で終らなくちゃならないという。現在の学生というのは、やはり中産階級の子弟が多いでしょう。学生運動をやっている連中は、めしの問題と結びついているのではない。そこでマルキシズムというものが生活と結びついてくるといよりは、一種のロマンティズムですね。ロマ

ンティズムで結びついているとするならば、明治の青年たちのプロテスタンティズムとの結びつきと同じです。それはやはり社会改革運動にも行っているわけですから。そうすると日本の青年たちがある外国の理念、もしくは宗教に結びつく場合の現象というのは、両方とも行動主義を背景とするロマンティズムだということは言えるでしょうか、どうなのでしょうか。そこに明治時代のプロテスタンティズム、それからいまのマルキシズムがもっている弱さがないでしょうか。だからかつて独歩がキリスト教から脱落したと同じように、あるいはほかの文学者がみんな脱落したように、それと同じように、マルキシズムの学生運動の連中が一度社会に出ると「はい、さようなら」をやっている。両方の現象があんまり相似しているのですね、そこに日本の青年のもっている一つの特徴というのがあるのではないでしょうか。

久山 キリスト教とマルクス主義というのは非常によく似ているところがありますね。明治以後の思想の中でも非常に価値体系がはっきりしていて、戦間的なエネルギーをもっている。そして終末的な目的論をもっているわけですね。しかもそれが主体化されず、また土着化されないで、単に青春の直接的ヒューマニズム触発の原理になった。そ

してその正義感も社会に出て人間の世界の暗さや自己の暗さが気づかれる頃になると崩れてくる。

遠藤 すると明治におけるプロテスタンティズムの受入れの仕方というものがやはり根本的欠陥があったのですか。

久山 文学や社会運動の世界で華やかに活躍した人たちの受入れ方は、福音的でなく、単なるヒューマニズムとしてで、そういう人に反発して批判的に福音的キリスト教を固めていった植村正久や、内村鑑三の行き方は、それとは非常に違うわけですね。私はキリスト教の受容にはまず第一に近代思想との対決が必要だと思うのです。それは今日のニヒリズムとの対決でもあるわけです。

話をこの「青春の記録」に戻しますと、妻の逃亡のあとで独歩はキリスト教的な詩を作っていますね。自分にそむいて去った信子に神の加護を祈る「嬉しき祈り」という詩なのです。「朝な朝な夕な夕な 我にうれしき祈りあり 祈りに曰く、ああわが神！ 彼女の上を守れかし！ われを見捨てし彼女の上に 肉にも霊にも安きを賜へ ああ此の祈り！ いかにうれしき祈りぞや 人なき室にただ一人涙とともに祈るなり！」妻に裏切られた苦悩をキリストの十字架の愛の枠に入れて、何とか感情的に処理しようという努力をしているわけです。そういうような気持ちをも